青年期女子の友人関係が自我同一性に与える影響

伊藤史子　吉村英
（大学院発達教育学研究科心理学専攻）　（教育学科教授）

自我同一性とはEriksonが自身の理論の中で提唱した概念であり，社会的側面と自己内の側面の二面が合わさる時点における，自分が何者かについて，そしてその自分が社会の中でどのような意味を持つかについての感覚である。自我同一性が注目される際には，特に青年期での自己の再構築や社会関係の再構築において，意図的な迷いや自己探索的な取り組み・選択の時期を経過したかどうかが問題視される。それは，その様な時期を経験したほうが，自我同一性の形成にとっては充実した過程であり，意識的な過程を経て独立へ向かうことが価値の高いものであるという価値観が背景に存在しているからである。この価値観は，自我同一性研究で広く共有されてきた。この価値観を用いるためには「“葛藤や探究をする（できる）自分”が青年期にすでに存在している」（無藤，1994）ということが前提となっていたが，このような前提が現代の青年の実態に合致していないという問題も提起されている。つまり，現代社会の激しい変動の中で，自我同一性に重要な要因が多様化し不明確になっていると考えられている。

Eriksonの提示した青年期の発達課題である自我同一性は，青年期までに自分が体験した様々な同一性を基盤にし，それらを単に増やすのではなく，他者とは違う独立した自分として内的要素を統合するというところに独自性を持つ。しかし，現代青年では主体としての自分が希薄になり，無藤（1994）のいうような“葛藤や探究をする（できる）自分”が十分に育っていない青年が増加していることを示唆する研究もある。さらに，青年期の自我同一性のあり方の変容という点も考えられ，現代青年にとって今まで検討されてきたような自立的で独立的な自己確立の過程は優勢ではなくなってきていることが推察できる。このような中，無藤(1994)は“穏やかな経過”というものを想定し，“他者との関係の中で自分を感じる”ことの重要性を提言している。自分を感じることはそれ自体が独立したものでなく，同時に他者の存在を感じることで実現することであり，自分と他者の相互関係における自我同一性形成が重要であると考えられる。

既存の自我同一性研究は，Eriksonの提唱した概念を基に，独立的な自己確立を目指す男性を想定して研究されてきた。下山（1986）はEriksonのライフサイクル論をもとに自我同一性尺度を作成しているが，これも既存の概念を踏襲したものだといえる。しかし，日本人に適した記述を検討したことや，青年期だけではなく発達段階全体を捉えて自我同一性を検討したという点については新しい観点の導入がなされたと考えられる。昨今の時代変動を考慮すると，自我同一性に新しい観点を導入することが重要だと考えられる。例えばMarciaの自我同一性地位面接の研究では，男子被験者がEriksonの示した自我同一性概念・危機概念を実証的に裏付けたのに対し，女子被験者では，自我同一性は安定さに基盤を置いているという結果を得ている（園田，1980）。研究数自体が少ないことや，その結果についての十分な検討がないことなどさまざまな問題点はあるが，近年の女性の発達に関する研究では，男性中心に構成されてきた理論への再検討が盛んに行われており，自己と

他者の相互関係の中での促進的な自我同一性形成の検討を行うことで，現代社会に適した考察を行うことができるだろう。

青年期は心理的離乳の時期であり，親離れが進む一方で，その代償関係としての友人関係が発展していく。おとなに対する反抗や葛藤の中で青年の心の支えとなるのが友人であり，深い結び付きとなる。この関係は成長に伴い変化があらわれるものであり，友人とどのように付き合うのかやその変化というのは青年にとって重要な問題となる。しかし，青年期の友人関係がどのように変化しているのかについて研究したものは，ごく少数しかなく（落合・佐藤，1996），友人との付き合い方の変化についての理解を深められる資料は少ないといえる。青年期には自己関心が高まるとともに，同一視をもたらすような深い友人関係を持つことで新しい自己概念を獲得する。児童期にみられるような表面的で活動的な友人関係から，青年期には情緒的に繋がるような親密的で深い友人関係に移行する。そういった情緒的な側面での安定や，友人を通して自分を客観的に捉えることのできる機会が存在するということは，青年期における友人関係の重要な意義である。

落合・佐藤（1996）では同性の友人との付き合い方についてその分類と発達的変化を調査しており，その関係が「浅く広く」から「深く狭く」という発達的変化がみられ，青年期の各段階によって友人との関わり方が変化することを捉えた。さらに女子に限ってみてみると，「浅く広く」から「深く狭く」という発達的変化が男子よりも顕著にみられ，友人と理解しあい共感しあうという関係を望み，関係の発達とともに形式を変化させていると考えられる。友人関係がとくに女子青年で問題となるのは，このように変化する友人関係に女子青年各自が対応していく必要があるということが，ひとつの要因ではないだろうか。

また，榎本（1999）は青年期における友人関係を活動的側面と感情的側面の２つの側面から捉え，その発達的変化を検討することで，青年の成長過程で友人関係がどのように変化するのかの理解を試みている。それによると，男女ともに成長するに従って相互理解へと進んでいくが，その過程で経験する活動や感情は異なったものであり，本質的な男女差が推察できた。男子は活動の共有が，女子は親密的な関係の構築が重要であり，その背後にある友人に対する様々な感情が青年を質的に異なる成長へと導いていることが考えられた。

1980年代後半頃から青年期の友人関係の希薄化を指摘する研究が見られるようになっている。岡田（1996）は，群れ，不介入，評価懸念という現代青年の特徴を抽出し，また，情緒的関係が深まらない形式的な関係はそつなくこなせるが，情緒的関係が深まるにつれ困難を感じそれを回避するという傾向を指摘した。このような表面的な関係をもつ傾向が指摘される一方，他者への配慮の欠如や他者への関心の無さへの指摘もなされており，友人関係に対する無関心が問題となっている。中園・野島（2003）は友人関係に対する態度として「無関心群」を見出しており，自分の安定のために友人に対して防衛的になり，それが無関心的な対処としてあらわれていると推察している。また，「無関心群」については性差があり，男子のほうが多い結果となった。これは，落合・佐藤（1996）が，女子の友人関係は友人と理解しあい共感するような，お互いがひとつになるような関係を望むものであると示したことを踏まえると，友人からの評価や関係の深まりを避ける傾向の女子が少ないのは妥当であると思われる。

こうした点を踏まえ，現代青年の友人関係を把握するためには特定友人との深い関わりだけでなく集団的な関わりにも注意を払い，視点を広げた検討を行う必要があるだろう。特に，情緒的な繋がりにおける友人関係を取り上げることは青年の発達における重要な要因の検討を現実に即して行えるものだといえるだろう。

自我同一性形成において，男性と女性ではその形成過程に重要となる要因に違いがあると考えた時に，他者からの自立や分離によって確立されるという考えに代わって，他者との関係性の中で確立されるという新しい観点が導入され

た。関係性への注目により，従来の自我同一性研究の方法に修正を加える必要性が説かれ，男性では「個人内領域」，女性では「対人関係領域」が重要であるという男女を二分して理解する図式が出来上がった（杉本，1998）。しかし，実証研究の結果はそのような二分図式を必ずしも支持せず，「対人関係領域」が本当に女性のみに有効なのか，領域を二分して相違を捉える意味はあるのか，という疑問を提起した。そもそも人が他者との関係がない状態で自我同一性を形成することはありえず，性差を領域別に考察するよりも男女ともに関係性という共通の認識を通じて検討する方が良い，という観点の転換が起こった。このように，本質的な内容へと焦点の移行が行われることが考えられるが，Eriksonが発達過程で他者関係が重要な役割を果たすと示したことを考えると決して特別なことではなく，青年期における重要な他者関係を取り上げるのは自我同一性形成を検討する上で重要な観点だといえる。

白鳥・清水（2001）では，自我同一性が確立されている人ほど友人に対して依存性が少なく，自分の意志をしっかりと持って独立的な態度をとることができるという結果が示された。友人関係と自我同一性の確立は密接な関係にあり，友人と安定的で独立的な関係を作れることが自我同一性形成に欠かせないと同時に，自我同一性の確立がそのような友人関係の基盤になっていると考えられる。また，自我同一性の状態に関わらず親友との間で強い信頼と安定が求められていることが明らかにされ，自我同一性達成に向かう要因は「信頼・安定」「独立」であり，逆に「不安・葛藤」といった要因は自我同一性達成を困難にしていると考えられる。

生田（1989）は友人関係に関して，外面的結び付きでは青年期前期よりも青年期後期の方が低くなる方向性がみられ，内面的結び付きでは青年期前期よりも青年期中期・後期の方が高いことを示し，青年期になると次第に深いレベルの付き合いを求めるという傾向を見出した。性差に関しては，青年期では女子の方が友人との強い結び付きを求めるということが確かめられ，自我同一性と友人関係の関連では，女子では友人関係と自我同一性が特に青年期後期で強く結びつくことが示唆されている。

青年期における友人関係を自我同一性と関連付けて取り上げることは，青年期が心理的離乳により親や家族との対人関係から友人との関係へと移行する時期であること，青年期の自我同一性が自分を取り巻く他者との間で確立されるものであり，青年が自分を模索する過程において友人関係は最も身近な環境から多大な影響を与え，青年が同一性を獲得する上で重要な役割を果たすことを考えると，妥当なことだと思われる。また，友人関係を考察する場面において質的に深く検討できる感情的側面を対象とすることは，青年期で対人関係の役割や様相が変化しそれが自我同一性に影響を与えるものだということを考えると，青年についてより詳しく考察できる結果を得られるだろう。自我同一性および友人関係を特徴的に捉えることで，友人関係が自我同一性に与える影響を類型的に把握でき，さらにはある自我同一性状態に特徴的な友人関係を探ることもでき，青年を考察する際に活用できる資料となるのではないだろうか。

本研究では，青年期の自我同一性について，友人関係が与える影響を検討する。自我同一性形成が青年期の発達課題であり，またこれまで多様な研究がなされていることからも，青年期を検討するにあたって自我同一性を考察することは意義のあることだと考えられる。従来の研究で友人関係と自我同一性の関係を直接検討したものは少なく，その考察は十分だといえない。現代青年においてその質的側面が問題となっている中，友人関係をそのような側面から捉えて自我同一性との関係を検討することで，現代青年の本質を捉えるような結果が期待できる。さらに，本研究では女子青年を対象とした研究を行う。近年盛んになってきたとはいえ，女性の自我同一性についての研究・考察は十分でない。性差の検討という観点も重要ではあるが，今回は女性のみを対象とすることで女性の自我同一性についての検討を深めたい。白鳥・清水(2001)のように安定的・独立的な友人関係が自我同一

性の形成を促進するのか，また生田（1989）のように友人との結びつきを重んじるような友人関係が抽出できるのかというのは興味深いところである。青年期女子の友人関係がどのような形で存在し，自我同一性形成にどう関係しているのかを調査し，その関係を検討する。

方　法

調査対象者　女子大学生　143名（平均19.1歳）

質問紙の構成　質問紙は，フェイスシートと自我同一性に関する項目群，友人関係に関する項目群，そして友人関係に関する自由記述の4つの部分からなる。

1．フェイスシート　学年，年齢について質問した。

2．自我同一性に関する40項目　下山（1986）の“自分の確立”尺度40項目を使用した。これは，6つの下位尺度（確実性，能動性，受容性，統制性，主体性，親密性）からなっている。この40項目に対して，「あてはまる」（1点）から「あてはまらない」（4点）までの4点尺度で回答する。また，40項目中14項目は逆転項目として得点化した。

3．友人関係に関する25項目　榎本（1999）の友人関係の感情的側面尺度25項目を使用した。これは，5つの下位尺度（信頼・安定，不安・懸念，独立，ライバル意識，葛藤）からなっている。この25項目に対して，「まったく当てはまらない」（1点）から「よく当てはまる」（4点）までの4点尺度で回答する。また，榎本の先行研究（1999）と同様に，「同性の親しい友人」を対象として回答するように教示した。

4．友人関係に関する自由記述　友人関係尺度で回答する際に対象とした「同性の親しい友人」について，自由に記述するように教示した。

実施方法　2007年6月中旬から7月中旬にかけて調査を実施した。質問紙の配布方法は，授業の開始時または終了時に配布し即日回答・回収を行ったものと，学寮にて質問紙の設置・配布を行い一定期間（1～2週間）経過後に回答された質問紙の回収を行ったものがある。授業時に実施した場合，調査実施時間は約15分であった。

結　果

1．“自分の確立”についての因子分析

“自分の確立”についての因子構造を明らかにするために，“自分の確立”尺度40項目の評定値にもとづいて探索的因子分析を行った。主成分分析法によって因子を抽出した後，プロマックス回転を行った。因子数については解釈可能性を検討した結果，6因子に決定した（Table 1参照）。各因子に高負荷している項目の中で，ひとつの因子にのみ高負荷である項目について各因子を構成する項目として採用し，各因子の解釈を行った。

第1因子は固有値10.61で，高い負荷量を示すのは「自分の行動力には自信がある」「自分ひとりで初めての事をするのは不安だ」「自分ひとりではなかなか決心がつかない」「自分は，何かを作り上げることのできる人間だと思う」「私は，積極的な生き方をしている」「何でも，物事を始めるのは億劫だ」「私には，困難な人生を生き抜くための土台がない感じがする」「私は，飽きっぽく，何かをやり遂げたという経験がない」の8項目である。これらの項目は，自分に対する信頼感や自分への自信を示す項目である。したがって，この因子は「自己への信頼と自信の因子」であると考えられる。

第2因子は固有値2.71で，高い負荷量を示すのは「社会の中で自分の生きがいがわかってきた」「私は，働く喜びを知っている」「私は，魅力的な人間に成長しつつある」「私は，人と協力して仕事をするのが下手である」「私には，自分のことを理解してくれる人がいるという安心感がある」「自分らしさというものがわかってきた」「自分の生き方は，自分で納得のいくものである」の7項目である。これらの項目は，外界，特に社会に対しての積極的な意思や，自分に対しての客観的な考えを示す項目である。したがって，この因子は「社会への主体性の因

Table 1 “自分の確率”の因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
自分の行動力には自信がある	−.822					
自分ひとりで初めての事をするのは不安だ	.734					.234
自分ひとりではなかなか決心がつかない	.706	.359		.256	.114	.121
自分は、何かを作り上げることのできる人間だと思う	−.703	.218		.103	.326	
私は、積極的な生き方をしている	−.522	.303			−.117	.156
危機や困難に直面するとしりごみしてしまう	.505	−.161		.144	.225	.429
何でも、物事を始めるのは億劫だ	.469	−.100		.195		
私には、困難な人生を生き抜くための土台がない感じがする	.445	−.328	.129		.107	
私は、飽きっぽく、何かをやり遂げたという経験がない	.434		−.236		.151	−.250
社会の中で自分の生きがいがわかってきた	−.173	.768		.130		−.250
私は、働く喜びを知っている		.746				−.206
私は、魅力的な人間に成長しつつある	−.164	.592	−.198		.241	
私は、人と協力して仕事をするのが下手である	−.340	−.549	−.207	.264	.116	−.291
私には、自分のことを理解してくれる人がいるという安心感がある	.147	.499			−.183	.357
自分らしさというものがわかってきた	−.250	.445			−.195	.181
自分の生き方は、自分で納得のいくものである	−.211	.431	.235	−.188	−.250	
自分は役に立たない人間だと思う	.253	−.266	.261	.176		−.109
私にとって性(セックス)はまだよくわからないものである	−.223		.818		.166	
自分にとっての男らしさ、女らしさがはっきりしていない	−.236	−.129	.765	.102	−.222	
自分が結婚することを考えてもピンとこない	.127	.141	.671	−.225	.106	
自分がこれからどのような人間になっていくのかわからない	−.101	−.307	.494		.387	.233
女性としての自分に自信がある	−.269	−.109	−.448		.270	.309
自分は、たいていのことで他の人より能力が劣っていると思う	.149		.426	.350	−.211	−.178
私は、やりそこないをしないかと心配ばかりしている			.422	.165	.214	.112
私は、人がみているとうまくやれない	.222		.419	.280		
自分が何者なのかわからない	−.304	−.345	.369	.224	.322	
私は、恥ずかしいことをしてきた人間だ	−.135		.151	.678		
何かしているより空想に耽っていることが多い	.109			.668		
私は気が変わりやすく、自分を一定に保つことができない	.283	.131	−.192	.612	.199	−.144
周りの動きについていけず、自分だけ取り残されたと感じることがある	.155		.158	.517		
私は、自分の身体や行動をコントロールできる	−.140			−.479	−.145	
私は、十分に自分のことを信頼している	−.318	.293		−.335	.139	
今の自分は、本当の自分でないような気がする	−.151	−.119			.685	
私は、どうしたらよいのかわからなくなると自分の殻の中に閉じこもってしまう			.191		.644	
私の心は、とても傷つきやすく、もろい		.163		.374	.631	
したいことをあまりやれないでいる	.245				.515	
異性との付き合い方がわからない	.130	.214	.344		.363	−.342
女に生まれてこなければよかったと思うことがある	−.303	.155		.246		−.732
私は、生まれてきて本当によかったと思う		.266			.179	.599
自分には信頼できる異性の友人がいる	−.105	−.142	−.153	.389	−.320	.570
固有値	10.61	2.71	2.42	1.79	1.65	1.61
寄与率(%)	26.54	6.77	6.06	4.49	4.13	4.03

子」であると考えられる。

第3因子は固有値2.42で，高い負荷量を示すのは「私にとっての性（セックス）はまだよくわからないものである」「自分にとっての男らしさ，女らしさがはっきりしない」「自分が結婚することを考えてもピンとこない」「自分がこれからどのような人間になっていくのかわからない」「女性としての自分の自信がある」の5項目である。これらの項目は，自分にとっての性やそれらに関する意識を示す項目である。したがって，この因子は「女性性の統合の因子」であると考えられる。

第4因子は固有値1.79で，高い負荷量を示すのは「私は，恥ずかしいことをしてきた人間だ」「何かしているより空想に耽っていることが多い」「私は気が変わりやすく，自分を一定に保つことができない」「周りの動きについていけず，自分だけ取り残されたと感じることがある」「私は，自分の身体や行動をコントロールできる」の5項目である。これらの項目は，自分の意識や行動に関する統制を示す項目である。したがって，この因子は「自分の統制性の因子」であると考えられる。

第5因子は固有値1.65で，高い負荷量を示すのは「今の自分は，本当の自分でないような気がする」「私は，どうしたらよいのかわからなくなると自分の殻の中に閉じこもってしまう」「私の心は，とても傷つきやすく，もろい」「したいことをやれないでいる」の4項目である。これらの項目は，自分に対する確かな実感を示す項目である。したがって，この因子は「自己の確実性の因子」であると考えられる。

第6因子は固有値1.61で，高い負荷量を示すのは「女に生まれてこなければよかったと思うことがある」「私は，生まれてきて本当によかったと思う」「自分には信頼できる異性の友人がいる」の3項目である。これらの項目は，自分の性や生に対する受容を示す項目である。した

がって，この因子は「自己の受容の因子」であると考えられる。

2．友人関係についての因子分析

友人関係についての因子構造を明らかにするために，友人関係の感情的側面尺度25項目の評定値にもとづいて探索的因子分析を行った。主因子法によって因子を抽出した後，バリマックス回転を行った。因子数については解釈可能性を検討した結果，4因子に決定した（Table 2参照）。各因子に高負荷している項目の中で，ひとつの因子にのみ高負荷である項目について各因子を構成する項目として採用し，各因子の解釈を行った。

第1因子は固有値6.57で，高い負荷量を示すのは「友達とは気持ちが通い合っている」「自分は友達に充分受け入れられていると思う」「友達は私のことならだいたい知っている」「友達は絶対私を裏切らないと思う」「心から友達を親友といえる」「友達とはだいたい意見が合う」「友達の考えていることはだいたい分かる」「友達を信頼している」の8項目である。これらの項目は，友達に対する信頼感や友達との関係が安定していることを示す項目である。また，この結果は榎本（1999）の結果における第1因子「信頼・安定」と同様の項目で構成されている。したがって，この因子は「信頼・安定の因子」であると考えられる。

第2因子は固有値2.56で，高い負荷量を示すのは「自分が本当に友達と思われているのか気になる」「自分が友達にどう思われているか気になる」「自分の思っていることを友達に言えない」「友達と意見が違うと不安になる」「友達の考えていることがわからなくなって不安になる」の5項目である。これらの項目は，友達に対する懐疑心や友達との関係の不安定さを示す項目である。また，この結果は榎本（1999）の結果における第2因子「不安・懸念」に含まれる項目で構成されている。したがって，この因子は「不安の因子」であると考えられる。

第3因子は固有値2.06で，高い負荷量を示すのは「友達のほうがテストの点がいいと不安になる」「友達にはさまざまな点で負けたくない」「友達よりいい仕事に就きたい」の3項目である。これらの項目は，友達に対する劣等感や優等感，ライバル意識を示す項目である。また，この結果は榎本（1999）の結果における第4因子「ライバル意識」と同様の項目で構成されている。したがって，この因子は「ライバル意識の因子」であると考えられる。

第4因子は固有値1.51で，高い負荷量を示すのは「友達のやっていることに引きずり込まれて困る」「友達の誘いを断れず困る」「友達といると自分のやりたいことができない」の3項目である。これらの項目は，友達との関係の間での葛藤を示す項目である。また，この結果は1項目を除き榎本（1999）の結果における第5因子「葛藤」と同様の項目で構成されている。したがって，この因子は「葛藤の因子」であると考えられる。

3．友人関係と“自分の確立”の関連

友人関係の各下位尺度にあらわされる状態が，“自分の確立”の各下位尺度であらわされる状態とどのような関連を持っているかを検討し，友人関係と自我同一性の関連を明らかにするために，友人関係の4因子を説明変数，“自分の確立”の6因子それぞれを目的変数として，重回帰分析を行った。その結果はTable 3に示す。

「自己への信頼と自信」については，「信頼・安定」が有意な正の影響を，「不安」が有意な負の影響を示した。「社会への主体性」については，「信頼・安定」が有意な正の影響を，「不安」が有意な負の影響を示した。「女性性の統合」については，「信頼・安定」が有意な正の影響を示した。「自己の統制性」については，「不安」が有意な負の影響を示した。「自己の確実性」については，「不安」「ライバル意識」が有意な負の影響を示した。「自己の受容」については，「信頼・安定」が有意な正の影響を示した。

Table 2　友人関係の因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
友達とは気持ちが通い合っている	.684	−.102	−.106	−.169
自分は友達に充分受け入れられていると思う	.667	−.215		−.110
友達は私のことならだいたい知っている	.643	−.247		
友達は絶対私を裏切らないと思う	.583	−.131		−.239
心から友達を親友といえる	.542		−.117	−.140
友達とはだいたい意見が合う	.531			
友達の考えていることはだいたい分かる	.526	−.183		
友達を信頼している	.519	−.164	−.143	−.367
友達に裏切られるのではと思う	−.432	.407	.200	.141
自分が本当に友達と思われているのか気になる	−.216	.702	.173	
自分が友達にどう思われているか気になる		.609	.210	
自分の思っていることを友達に言えない	−.342	.554		.257
友達と意見が違うと不安になる		.527	.144	.234
友達の考えていることがわからなくなって不安になる	−.255	.521	.172	.187
友達と意見が対立しても自分をなくさないでいれる	.128	−.461		−.171
友達が自分の知らない友達と話しているのを見て寂しさを感じる		.457	.310	.287
友達のほうがテストの点がいいと不安になる		.285	.733	
友達にはさまざまな点で負けたくない			.722	
友達よりいい仕事に就きたい	−.183		.672	
友達のやっていることに引きずりこまれて困る	−.161	.130	.134	.571
友達の誘いを断れず困る		.201		.507
友達といると自分のやりたいことができない	−.292		.334	.481
友達に「仲間はずれにされた」と感じることがある		.282	.204	.478
友達と違う意見でも自分の意見はきちんと言う		−.463	.243	−.473
友達と一緒にいても自分の意思で行動している	.161			−.386
固有値	6.57	2.56	2.06	1.51
寄与率（%）	13.70	11.87	8.36	7.89

Table 3　重回帰分析の結果

目的変数	説明変数				
	信頼・安定	不安	ライバル意識	葛藤	R^2
自己への信頼と自信	.201 *	−.319 **	.083	.012	.181 **
社会への主体性	.445 **	−.151 *	.045	−.081	.312 **
女性性の統合	.297 **	−.080	.060	.044	.103 **
自己の統制性	.094	−.349 **	−.083	.067	.165 **
自己の確実性	.141	−.184 *	−.157 *	−.006	.126 **
自己の受容	.355 **	.083	.010	−.009	.109 **

数値は標準偏回帰係数（β），* p <.05 ** p <.01

4.「信頼・安定」高群・低群と“自分の確立”の関連

友人関係と“自分の確立”の関連について検討した際，「信頼・安定」では重回帰分析において有意な結果が多く得られた。「信頼・安定」と“自分の確立”の関連をさらに詳しく検討するため，全てのデータから「信頼・安定」得点の平均値を算出し，「信頼・安定」得点が平均値以上のものを「信頼・安定」高群，平均値未満のものを「信頼・安定」低群として2つの群に分けた。「信頼・安定」高群・低群ごとの“自分の確立”各因子の平均値をFigure 1に示す。

この2つの群を使用し，「信頼・安定」得点の高低による“自分の確立”の差を検討した。“自分の確立”の各下位尺度を繰り返し要因とし，「信頼・安定」水準の要因と“自分の確立”の要因の2要因からなる分散分析を行った。その結果，“自分の確立”の主効果は有意であった（F=34.028, df=5/705, p=.000）。「信頼・安定」水準の主効果は有意であった（F=19.785,

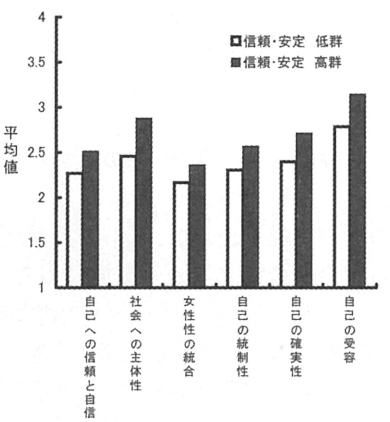

Figure 1　自我同一性の平均値

$df=1/141$, $p=.000$)。しかし，交互作用は有意でなかった。

5．「不安」高群・低群と“自分の確立”の関連

友人関係と“自分の確立”の関連について検討した際，「不安」では重回帰分析において有意な結果が多く得られた。「不安」と“自分の確立”の関連をさらに詳しく検討するため，全てのデータから「不安」得点の平均値を算出し，「不安」得点が平均値以上のものを「不安」高群，平均値未満のものを「不安」低群として2つの群に分けた。この2つの群を使用し，「不安」得点の高低差による“自分の確立”の差を検討するために，2要因の分散分析を行った。「不安」高群・低群ごとの“自分の確立”各因子の平均値はFigure 2に示す。

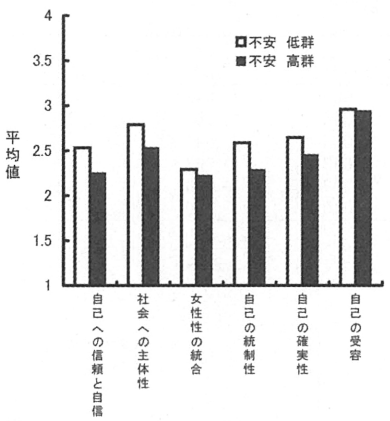

Figure 2　自我同一性の平均値

この2つの群を使用し，「不安」得点の高低による“自分の確立”の差を検討した。“自分の確立”の各下位尺度を繰り返し要因とし，「不安」水準の要因と“自分の確立”の要因の2要因からなる分散分析を行った。その結果，“自分の確立”の主効果は有意であった（$F=32.889$, $df=5/705$, $p=.000$)。「不安」水準の主効果は有意であった（$F=7.185$, $df=1/141$, $p=.008$)。交互作用には有意傾向があった（$F=1.927$, $df=5/705$, $p=.088$)。さらに詳しく検討するために，TurkeyのHSD法による下位検定をおこなった。「不安」高群・低群によって“自分の確立”の平均値に差があるか検討した結果，「自己への信頼と自信」（$q(2,846)=3.82$）「社会への主体性」($q(2,846)=3.51$)「自己の統制性」($q(2,846)=4.09$）で有意差がみられた。

考　察

1．“自分の確立”についての因子分析

因子分析の結果，「自己への信頼と自信」「社会への主体性」「女性性の統合」「自己の統制性」「自己の確実性」「自己の受容」の6つに分類された。この6つの分類は，下山（1986）の因子分析結果とはかなり異なるものであった。下山（1986）は本研究と分析方法が異なっている。本研究では，“自分の確立”を構成する因子は相互に影響していると考えたためプロマックス回転を行っており，分析方法の違いが結果の違いに関係していることが考えられる。また，大きな要因として，本研究は調査対象を女子のみとしているため，男女混合の青年を対象とした調査とは異なる結果を得たことが考えられる。第3因子のように，女性性に特徴をもつ項目を含んだ因子が抽出されたのは，その様な本研究の特徴を表わしたものだといえる。さらに，下山（1986）は各因子の内容をEriksonの発達段階との類似的対応によって説明しているが，本研究の結果ではその様な特徴は見られなかった。この様に，“自分の確立”については下山(1986)の構造と異なっていることがわかり，本研究の目的である「青年期女子の自我同一性」を検討するうえで，因子構造を再構築したことは有意義な結果であると考えられる。

2．友人関係についての因子分析

因子分析の結果，「信頼・安定」「不安」「ライバル意識」「葛藤」の4つに分類された。この4つの分類は，榎本（1999）の因子分析結果とは異なるものとなっている。榎本（1999）は本研究と同じ分析方法であるが，本研究の因子構造は榎本（1999）と異なる因子構造を示している。しかし一方で，それぞれの因子に含まれる内容には榎本（1999）の抽出した因子との共

通性がみられた。榎本（1999）が調査対象を中学生から大学生の男女としてデータを収集したことに対して，本研究では調査対象を大学生の女子に限定している。その様な違いがあるにもかかわらず，各因子に含まれる内容に共通性がみられることから，友人に対して抱いている感覚には男女差や年齢差があまりないことが推察される。また，本研究では「独立」の因子が抽出されなかった。これは，従来考えられていた友人関係における独立要因の重要性が，近年新しく検討されているように男性特有のもので女性については当てはまるか疑問であるという考えを支持する結果だといえる。ただし，榎本（1999）の研究が示すように，独立要因を含めて検討した場合，その状態における男女差はなく，また青年期が進むにつれて独立状態が強くなるという結果もあり，女性における独立要因の重要性は慎重に検討しなくてはならない。

3．友人関係と“自分の確立”の関連

「自己への信頼と自信」については，友人に対する信頼・安定の傾向が強いほど自分に対する信頼や自信が強くなり，反対に友人に対する不安の傾向が強いほど自分に対する信頼や自信が弱くなることが示された。これは，友人関係の安定が自己の安定に，友人関係の不安定さが自己の不安定に関係するという，至極妥当な結果だと考えられる。友人関係が自我に影響を及ぼしている可能性を強く示す結果だといえるだろう。「社会への主体性」については，友人に対する信頼・安定の傾向が強いほど社会に対する主体性が強くなり，反対に友人に対する不安の傾向が強いほど社会に対する主体性が弱くなることが示された。友人関係での安定状態が社会へのかかわりを促進し，不安状態が社会へのかかわりを抑制するというのは，友人関係という狭い社会関係が良い状態か否かで，さらに大きな存在である社会全体への働きかけが左右されると考えられる。社会との関わりは人との関わりでもあるので，社会に対する主体性が友人関係の中で示されているととらえることができるだろう。人を介在として社会に主体性を持つことができるかが，友人関係の安定・不安定に見られるというのは，社会を人が構成しているという観点から考えると妥当だと思われる。「女性性の統合」については，友人に対する信頼・安定の傾向が強いほど女性性の統合が強いことが示された。友人との安定した関係の中では，自身の性について考える機会が多く得られると推察できる。本調査では対象を女性に調査を行っており，また同性の友人との関係についての回答を収集しているので，女性にとって同性友人関係が自分の性の受容に促進的な影響を与えているという点は，注目すべき結果である。この結果が異性友人関係ではどうなるのか，同性友人関係が性の受容を促すのは女性だけなのかなど，今後検討していくべき問題もあるだろう。「自己の統制性」については，友人との関係に不安があると，自分の行動や意思をうまくコントロールすることができないという傾向が示された。友人関係の不安状態が自我に負の影響を与え，自分を律することができず自我の弱い状態になると考えられる。自己の統制性については，友人関係の信頼・安定状態は有意な影響を与えず，友人関係に対する不安が強いか否かが統制性の脆さに影響を与えていると考えられる。「自己の確実性」については，友人に対して不安やライバル意識の傾向が強いほど自己の確実性が弱いことが示された。友人との関係に不安を感じていたりライバル意識を持っていたりすると，確固たる自我を発達させることができないといえる。つまり，友人に対する強い不安感やライバル意識は自我の発達を抑制させると考えられる。友人に対する葛藤の傾向が自己の確実性に抑制的な影響を及ぼさないという結果は，興味深い結果だといえる。不安や葛藤は自我発達に抑制的な要因だと考えられているが，実際にはすべての側面に負の影響を与えているのではなく，ある要因が与える影響は各側面について異なっていることがわかる。「自己の受容」については，友人に対して信頼・安定の傾向が強いほど自己の受容が強いことが示された。友人との間で安定した関係を築けていると，自己に対する安定した受容につながると考

えられる。友人を受容することが，自己の受容とも関連していることが考えられる。自己の受容に関しては，友人関係におけるマイナス要因の関係はみられず，友人に対する安定した状態を強く感じるほど自己の受容が促進されると考えられる。また，全体を通して「ライバル意識」「葛藤」の因子では有意な結果が得られていない。つまり，友人関係においてライバル意識や葛藤感情を持っていても，“自分の確立”における影響はほとんどないといえるだろう。

以上の結果より，友人関係と自我同一性の因果関係はある程度立証されたといえるだろう。特に，友人関係の「信頼・安定」と「不安」の二つの異なった状態が自我に与える影響についてはその方向性が反対であることが結果として示され，自我の状態は友人関係によって影響を受けていることがわかった。また，女性特有の自我状態についての有意義な考察も行うことができ，今後の展望が期待できる結果を得られたと考えられる。

4.「信頼・安定」高群・低群と“自分の確立”の関連

各要因の主効果は有意であったが，交互作用はみられなかった。よって，“自分の確立”の各因子の平均点は，低群よりも高群のほうが高いと考えられる。

データ全体から算出した“自分の確立”の各因子の平均値をFigure 3に示す。Figure 3はFigure 1とほぼ同様の形をしている。一番平均値が高いのが「自己の受容」でその次に高いのが「社会への主体性」。「自己への信頼と自信」「自己の統制性」「自己の確実性」はだいたい同じような値で，一番平均値が低いのは「女性性の統合」である。以上のことから，青年期女子は，自分自身を受け入れる感覚や社会への積極的な関係の構築はうまく成立しているが，自分の性に対する意識の統合はあまり成立していないと考えられる。ただし，それらについて「信頼・安定」の要因がどのように影響しているのかは，今回の結果からは検討することはできなかった。

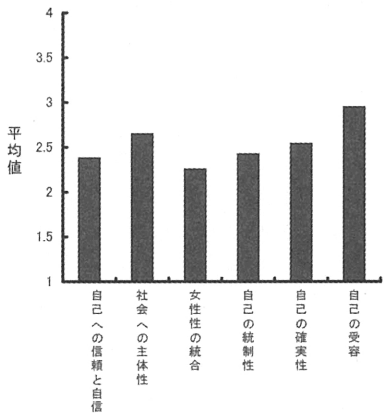

Figure 3　自我同一性の平均値

5.「不安」高群・低群と“自分の確立”の関連

交互作用に有意傾向があったことから，下位検定を行い，「不安」低群・高群による平均値の差が“自分の確立”のどの因子で有意かを検討した。その結果，「自己への信頼と自信」「社会への主体性」「自己の統制性」では「不安」高群の方が低群よりも有意に低い平均値であることがわかった。つまり，友人に対して不安を感じていると，自分に対して自信を持ったり，社会に積極的に関係したり，自分の心と体をうまくコントロールしたりすることができにくいと考えられる。また，友人に対して不安を感じていても，自分の性に対する意識，自分という存在への実感，自分の性・生を受け入れる姿勢には影響がないことが考えられる。以上のことから，友人関係における「不安」要因は“自分の確立”にある程度の抑制的な影響を及ぼすと考えられる。

まとめと今後の課題

本研究は青年期女子を対象とし，自我同一性と友人関係について検討した。

まず，自我同一性と友人関係の因子構造について検討した。その結果，自我同一性については6つの因子を，友人関係については4つの因子を抽出した。先行研究とは異なった因子構造を考察することができ，貴重な資料を示すことができた。

次に，友人関係が自我同一性に与える影響について検討した。重回帰分析の結果，友人関係が安定状態にあると自己の受容，社会への主体性，女性性の統合が強く，逆に不安状態にあると自己への自信や自己の統制性が低いことが明らかとなった。また，友人関係における信頼・安定要因と不安要因をそれぞれ高群と低群に分け，自我同一性形成にどう影響しているかを2要因の分散分析を行い検討した。その結果，信頼・安定要因では交互作用がみられなかったが，不安要因では交互作用がみられ，友人関係における不安要因が自我同一性形成における抑制要因であると考えられた。以上のように，友人関係が自我同一性に影響を与える可能性を強く示す結果が得られた。特に，友人関係における信頼・安定要因と不安要因は大きな影響力を持ち，信頼・安定要因は形成の促進に，不安要因は形成の抑制に関係していると考えられる。この点については，更に詳しく考察する必要があるだろう。

本研究は，女子青年を対象として，同性友人関係とそれに関連した自我同一性状態を探ったものである。友人関係の重要性は先述したが，同性，異性それぞれの友人関係を並行して考察する必要性は大きいと思われる。特に性の意識については，同性関係，異性関係ともに重要であることが考えられ，今回の考察とあわせて異性友人関係の考察をする必要があるだろう。また，“親しい友人”という限定した友人関係を扱ったが，回答者の主観的な友人関係の他にも友人関係はさまざまな方法で捉えることができ，扱いたい友人関係を適切に抽出する方法の検討が求められるだろう。また，友人関係の変容という観点からみると，狭い特定友人関係だけではなく，比較的広い友人関係も含んだ考察が求められる。

自我同一性は，時代とともにその様相が変化し様々に研究されてきた領域である。しかし，現代の実状を的確に捉える事の出来る資料はまだまだ数多いとはいえない。今後の研究に求められるのは，時代に即した研究であり，青年の本質を捉え理解できる資料を収集できるような研究であろう。その為には，基本的な資料を蓄積した上で，新しい研究方法や概念をより一層充実させていく必要があるだろう。

引用文献

榎本淳子（1999）．青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的変化　教育心理学研究，47－2，180－190.

生田友里（1989）．青年期の友人関係と発達的研究―アイデンティティとの関連で―　名古屋大学教育学部紀要教育心理学科，36，169－170.

無藤清子（1994）．青年期とアイデンティティ「自分」を，そして「ひと」を，確かに感じとること　こころの科学，53，47－51.

中園尚武・野島一彦（2003）．現代大学生における友人関係への態度に関する研究―友人関係に対する「無関心」に注目して―　九州大学紀要心理学研究，4，325－334.

岡田努（1996）．現代青年は本当に変わってしまったのか―友人関係を中心として―　日本青年心理学会大会発表論文集，4，49－50.

落合良行・佐藤有耕（1996）．青年期における友達とのつきあい方の発達的変化　教育心理学研究，44，55－65.

下山晴彦（1986）．大学生の職業未決定の研究　教育心理学研究，34－1，20－30.

白鳥優子・清水紀子（2001）．青年期女子のアイデンティティ形成と友人関係　日本教育心理学会総会発表論文集，43，518.

園田雅代（1980）．女子大学生における自我同一性研究―理論的考察と実証的検討―　玉川大学文学部紀要，21，319－368.

杉本和美（1998）．女子青年のアイデンティティ―「関係性」をキーワードとして　現代のエスプリ，372，40－49.